

一人朗読シナリオ（5 分尺）

「流れ星の、その先で」—蒼空一人語り

《BGM：♪静かなピアノ・冬の夕暮れ（fade in）》

《SE：風の音、教室のざわめきが遠ざかる》

蒼空（語り）

冬の空気が、少しだけ痛い。

放課後の教室。

残っているのは、俺と——凧咲だけだった。

シャーペンの芯が紙をかすめる音。

その静けさの中、彼女の声が響いた。

「ねえ、そらくん。……12月14日って、何の日か知ってる？」

顔を上げると、凧咲が笑っていた。

夕暮れの光が頬にかかって、少し眩しい。

「えっと……クリスマスまであと10日？」

「ぶっぶー。違います。正解はね、ふたご座流星群」

ふたご座流星群——。

その言葉が、胸の奥に小さな光を落とした。

「よかったら、一緒に見に行かない？」

その一言で、世界の色が少し変わった気がした。

《SE：夜風、足音、缶ココアを開ける音》

蒼空（語り）

凧咲と歩く帰り道。

街灯の下で飲む缶ココアが、やけに甘かった。

「なんで、そんなに好きなの？ 流星群」

凧咲は少し考えて、空を見上げた。

「誰かと一緒に空を見てるって、それだけで嬉しくなるから」

その横顔を見て思った。

彼女は、きっとこの町の外を見ている。

届かない場所に行く人なんだ——って。

《BGM：♪星が瞬くようなピアノ曲》  
《SE：風の音、流れ星の効果音（チリチリッ）》

蒼空（語り）  
夜空を見上げる。  
無数の光が、息をするように流れていく。

「見た？ 今の、長かったね」  
凧咲の声が震えていた。

そのあと、彼女はぽつりと呟いた。  
「わたし、春にこの町を出るの。東京の大学に……」

頭の中が真っ白になった。  
分かっていたはずなのに、受け止めきれなかった。

「……そっか」  
それしか言えなかった。

でも——彼女は笑った。  
「でも今日、来てよかった。そらくんと流れ星、見れて」

その笑顔が、泣きそうなほど綺麗だった。

「わたしね、流星群と一緒に見た人と、来年もまた見たいって思ってたの」

その瞬間、俺は決めた。

「来年、俺が行く。東京でも、同じ空は見えるよな？」

凧咲の瞳が、夜の光を映して揺れた。  
「……うん。約束、してくれる？」  
「するよ。流れ星に願うより、ずっと確かな約束を」

《BGM：♪温かなピアノ／再会を思わせる旋律》  
《SE：携帯のバイブ音→通話音》

蒼空（語り）  
一年後。東京の空。  
見上げても星は少ないけれど、あの夜の約束を思い出す。

電話の向こう、懐かしい声が聞こえた。

「……空、見てる？」

「うん。今、ちょうど流れたよ」

遠く離れていても、同じ空を見ている。

それだけで、心が少し温かくなった。

《BGM：♪希望を感じる音に変わっていく》

《SE：夜空を流れる星の音》

蒼空（語り）

流れ星は、すぐに消えてしまう。

けれど、あの日交わした約束は、

どんな空よりも確かに——今も俺の胸の中で光っている。

（フェードアウト）

——完。